



**Data** 2025-91

監督: 管虎 (グァン・フー)

脚本: 管虎 (グァン・フー)、葛端 (ゴ・ルイ)、呉兵 (ウー・ビン)

出演: 彭于晏 (エディ・ボン) / 佟麗婭 (トン・リーヤ) / 賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) / 張譯 (チャン・イー) / 周游 ( Zhou Yu )

## 👁️👁️ みどころ

“パルム・ドール賞”は誰でも知ってるが、あなたは“パルム・ドッグ賞”を知ってる？同賞の歴史は古いが、ウォルト・ディズニーのかわいい犬たちを主人公にした映画とは異なり、本作では荒涼としたゴビ砂漠とその近くの寂れた街を舞台とした、孤独な人間と孤独な犬の絆をしっかりと確認したい。

2008年の北京オリンピックに向けて赤峽の街も盛り上がり、区画整理事業が進んでいたが、その影響は？野犬の大量発生は一体なぜ？そして、そこで起きた某事件によって収監されていた男が仮釈放で戻ってくると・・・？

『幸せの黄色いハンカチ』(77年)では、高倉健扮する孤独な主人公が故郷に戻ってくると感動的な結末が待っていたが、本作にみる、故郷に戻ってきた主人公を待ち受ける過酷な人生ドラマとは？

管虎 (グァン・フー) 監督が第6世代を代表する監督の1人であることを、私は本作で初めて確認。高倉健以上に寡黙で、セリフが皆無とも言える主人公の“魂の叫び”と、人間同士ではありえない、人と犬との絆の素晴らしさをしっかりと確認したい。コロナ禍なればこそ生まれた本作の味わい深さをじっくりと！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■本作は第6世代監督作品！グァン・フー監督に注目！■□■

中国の第5世代監督の代表は張芸謀 (チャン・イーモウ) と陳凱歌 (チェン・カイコー)。また、その成果を引き継ぎ新たな形で発展させたのは、婁燁 (ロウ・イエ)、賈樟柯 (ジャ・ジャンクー) らに代表される第6世代監督だが、本作の管虎 (グァン・フー) も第6世代を代表する監督の1人であることを私は本作で初めて知った。彼は、アート系のインディペンデント作品をいろいろと展開してきた中国ではいわば“異端派”(?)のロウ・イエや

ジャ・ジャンクーと異なり、テレビドラマから人気を獲得していった監督らしい。

そんなグアン・フー監督の活躍はパンフレットにある劉文兵氏（大阪大学大学院人文学研究科准教授）の「グアン・フー、中国第6世代監督の新しい才能—国内で実績を積み、海外市場へ」に詳しいが、「中国の一般大衆レベルでの影響力においては、第六世代監督のなかでグアン・フーの右に出るものはないかもしれない。」そうだ。また、私は『八百』（20年）『シネマ 54』177頁）がグアン・フー監督の作品だったことを知ってビックリ。同作は2020年の興行No.1を叩き出したそうだからすごい。

そのグアン・フー監督が、コロナ禍の中で改めて自己の内面と向き合い、己の作家性を追及して練り上げたのが本作だが、そこでは今の私がトコトン追及しているのと同じように、「原点に戻り、撮りたい作品を撮る」ことを徹底させたそうだ。

## ■□■本作の主人公は？舞台設定は？■□■

本作の主人公は刑務所から出てきたばかりの無口な男ラン（彭于晏／エディ・ポン）。そんな設定を見れば、日本人なら誰でも、高倉健の『幸せの黄色いハンカチ』（77年）を思い出すはずだ。本作のランのイメージも高倉健そっくりの“寡黙な男”だが、ランは高倉健よりずっと若し、ヤクザでもない。彼が刑務所に入った事情や、仮出所故郷であるゴビ砂漠西端にある街、赤峽にバスに乗って戻ってきた事情は、ストーリー展開の中でしっかり確認してもらいたい。

本作冒頭では、横長のスクリーンいっぱい広がるゴビ砂漠の荒涼たる風景に注目！続いて、スクリーンの左端に1台のバスが見えたかと思うと、いきなり右手の山の上から野犬の群れが下っていく姿にビックリ！それに驚いたのは観客だけでなく、バスの運転手も同じだったようで、バスは見事に横転してしまったから、さあ、大変だ。バスは、そして乗客はどうするの？また、いくらゴビ砂漠とはいえ、こんな野犬の集団がなぜ発生しているの？

## ■□■故郷に戻って見たものの？事件の報復は？区画整理は？■□■

『幸せの黄色いハンカチ』のラストでは、武田鉄矢と桃井かおりが演じた2人の若者の助けを借りて、やっと実家に戻り着いた主人公に対して、最高のエンディングが用意されていた。しかし、本作のランは、バスの横転事故という試練を受けながら故郷に戻ってきたものの、実家はもぬけの殻だから、アレレ。鍵を預かってくれていた隣人の話によれば、ランの父親は自分が経営している赤峽動物園に泊まり込み、酒浸りの生活をしているそうだ。他方、仮釈放の身のランは警察への所定の手続きを済ませたが、ある日、「あの事件」の被害者の家族が「絶対に許さない」と執拗につきまとってきたから、大変！この先が思いやられるというものだ。

他方、中国では2008年の北京オリンピックに向けて国を挙げての運動が盛り上がっていたが、それはゴビ砂漠西端の赤峽でも同じ。赤峽では区画整理事業が行われ、ランの家も立ち退きを迫られていたが、同事業の展開は？また、住民の立ち退きに伴って野良犬が急

増殖していたが、それに対する当局の対応は？

## ■□■パルム・ドッグ賞をゲット！その立役者は黒のウィペット犬！■□■

私はお笑い芸人を起用したアホバカバラエティ番組は全く見ないが、近時、「坂上どうぶつ王国」と「いぬのじかん」に凝っている。私は子供の頃から犬が大好きだったが、父親がペットとして飼うことを許してくれなかったため、1度も犬を飼ったことはない。そんな思いがあるから余計にこの2つの番組を毎回楽しみにしているわけだ。

他方、あなたはカンヌ国際映画祭に“パルム・ドッグ賞”があることを知ってる？その全貌はネット情報を見ればわかるが、私が強く印象に残っているのは、第3回パルム・ドッグ賞を受賞した『ドッグヴィル』(03年) (『シネマ4』135頁)。ニコール・キッドマンが主演した同作はめちゃ難しい映画だった上、同作でパルム・ドッグ賞を受賞した犬、モーゼスの出番は最後のワンシーンだけだった。それに対して、原題を「狗陣」とする本作では、黒の細身のウィペット犬の“小辛(シャオシン)”が準主役としてほぼ全編出ずっぱりになるので、その演技(?)に注目！

本作での小辛の最初の出番は、ランがふるさとに戻った直後。その出会いは、ランが立ち小便をしているところに小辛が寄ってくるものだから、可もなく不可もなくだった。しかし、2度目の出会いは、小辛に多額の懸賞金がかけられていることを知ったランが、道具を用意して小辛を捕獲しようとした時だから大変。そこで見事に小辛に敗北したランはお尻や左足を噛まれたから、ひょっとして狂犬病に？他方、地元の野良犬捕獲隊の一員となったランは、その仕事に従事していたが、ペットを奪われた女の子が泣き叫んでいる姿を見ると、密かにそのペットをその子に返してやっていたから、アレレ、アレレ。さらに、捕獲隊の奮闘によってやっと捕獲した小辛をランが護送中に、ゴビ砂漠を襲った嵐によって車が横転してしまうと、そこから起きるランと小辛との奇跡の結びつきと友情に注目！チラシには、「罪を背負った青年と、賞金首の黒い犬。“野良犬同士”の奇妙な絆が共鳴するー」、「ふたりぼっちの、野良犬だった」と書かれているが、本作中盤では、まさにそんなランと小辛の絆をたっぷり楽しみたい。

## ■□■動物園の他、雑技団(サーカス団)の実態にも注目！■□■

愛媛県松山市の中心部で生まれ育った私は、中学時代まで毎週自転車道後温泉に通っていたが、そこには動物園があったので、子供時代は何度もそこを訪れていた。子供の頃に見た松山の動物園に比べると、本作のスクリーン上に見る赤峽動物園は寂れてしまっただけのもの、その広さやバンジージャンプの設備の立派さにビックリ！この動物園は今や廃業寸前だが、それでも酒浸りのランの父親が、今なお虎にエサを配っていたから、それにもビックリだ。

他方、小辛の護送中にゴビ砂漠を襲った嵐のために車を横転させてしまったランは、たまたま興行のために赤峽にやってきた雑技団の一行に救われたからラッキー！私は中国旅行で何度か雑技団の公演を見たが、日本のサーカスとよく似た雑技団の演技はめちゃ面白

い。しかも、本作では、なぜかランとぴったり雰囲気合う雑技団のダンサーのグレーブ（佟麗婭／トン・リーヤー）がかなり魅力的な女性だから、その生きざまと2人の交流の姿に注目！まさか、そんな2人が結婚で結ばれることはないだろうが、父親と死別し、帰郷後いろいろとお世話になった卤肉館の店主・ヤオ（賈樟柯／ジャ・ジャンクー）とも死に別れてしまったランが、ますます天涯孤独の身になる中、ひょっとして・・・？

## ■□■バイク上のランとサイドカー上の黒犬の一体感に注目！■□■

バイクに乗って疾走する姿が最高にカッコ良いのは、昔は、『大脱走』（63年）で見たステーブ・マックイーン。近時は、『ミッション：インポッシブル』シリーズに見るトム・クルーズだ。他方、広いゴビ砂漠の西部にある町、赤峡で、帰郷後バイクを愛好しているランの姿もかなりカッコ良い。

本作では導入部から一貫してランのセリフの少なさ（無さ？）が目立っているが、そうだからこそ、1人でバイクを疾走させる姿も実によく似合っている。しかし、あの嵐の日、ランが小辛を護送していた車の横転事故を契機として、ランと小辛の間に固い絆が築かれると、サイドカー付きのバイクに乗り換えたランと、サイドカー付バイクにちょこんと座る小辛の姿が実によく似合い、キマっているから、それに注目！サイドカー上に見る“ハグレ”者同士、“孤独な者”同士のこの2ショットは、実によくキマっている。

狂犬病の疑いをかけられたランは10日間の隔離を余儀なくされたが、そんな逆境（？）の中、逆にランと小辛の絆が強まっていくので、その展開に注目！しかし、ランと小辛との間に生まれたその絆は、決して2人を安定させるものにはならず、逆に孤立するランをさらなる窮地に追いやっていくことに。父親も死亡し、動物園も閉鎖され、虎が勝手に市内に逃げ出してしまった（？）今、古い建物の取り壊しと区画整理事業は着々と進んでいるようだが、古い赤峡のまちは、そしてランと小辛の友情はこれからどうなるの？

## ■□■バイクに乗ったランのリュックの中の子犬は？■□■

本作ラスト近くでは、サイドカーに小辛を乗せたランを野犬の群れが出迎える（？）、何とも異様な風景が登場する。本作冒頭では、そんな状況下でバスが横転してしまったが、ここでは、バイクを降りサイドカーを押しながら歩いていくランを、野犬たちが道を開けながら見守る風景になるので、それに注目！なぜ野犬たちはランと小辛に尊敬の念（？）を抱きながら道を開けていったの？それをじっくりと考えたい。

他方、本作ラストには、父親ともヤオとも別れ、動物園とも別れたランが、今度はサイドカーではなく、子犬を入れたリュックを背中に背負い、1人バイクに乗って赤峡から離れていくシーンになる。PRODUCTION NOTESによると、本作のために使われた黒い犬は計7匹とのこと。「子犬を産むシーンでは、いつ生まれるかわからないため、20日間クルーは待ち続けた」そうだ。人間の寿命は70～80歳だが、犬の寿命は15～20年。さて、本作のラストシーンにみる、ランの背中のリュックの中に入っている子犬は一体・・・？

2025（令和7）年9月26日記